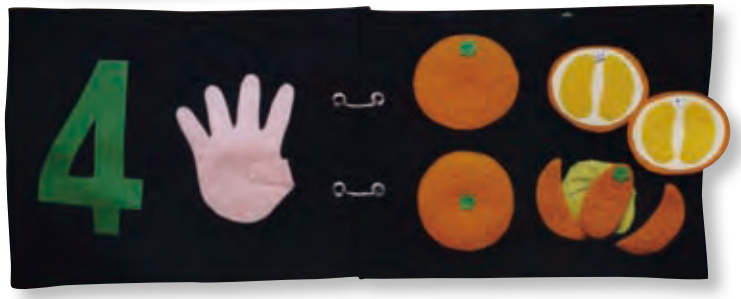
布の絵本「おはよう　おやすみ」
目の部分がボタンなので、ボタンをかけると目を覚まし、ボタンをはずすとスヤスヤ眠っているように見える



布の絵本「いくつ？」
すずらん文庫原作
「みかんがよーつ！」
半分にわけるとー、皮をむくとー

［上］東京布の絵本連絡会企画・発行 1996 年。表紙絵は、阪神・淡路大震災（1995 年）の被害を受けた神戸市学が丘保育園児（5 歳児）たちが描いた絵本「おこったなまず」の「ビルも燃えて」の 1 ページを布の絵本にした場面。すずらん文庫、小川友江制作

［右上］自分たちの絵が、そっくり布で縫われていて大喜びの神戸市学が丘保育園児たち

［右］「世界のバリアフリー絵本展」2003 年巡回スタート展。東京布の絵本連絡会の各グループごとにテーブルを用意し展示

素材のやさしさと作った人のぬくもりが伝わって（心と心を結ぶ布の絵本）

はじめに

わが国では、テレビ子守り、ビデオづけ、ゲーム機器、携帯電話、パソコンなど映像・電子メディア時代に生まれ育ってきた子どもたちの「言葉の遅れ」や「活字離れ」が問題になって久しい。それどころか「人間としての育ち」が問われています。この四月にも白鳥が一五羽も棒で殴り殺された事件が報道され、誰もが胸痛む思いであったと思います。巣抱いていた卵も割られていました。加害者の中学生は「羽を広げて抵抗する白鳥を殺すのが楽しかった」と供述しているという（朝日新聞二〇〇八年五月一五日）。

私の文庫活動は、子どもたちに楽しい思い出づくりと、心に残る絵本との出会いをとおして、「豊かな子ども時代＝人間育ち」を願っての三五年間でした。しかし、人や動植物への生命がますます軽視される事件が報道される度に、文庫活動に対して無力感さえ覚えます。でも、あきらめてはいられません。だからこそ文庫実践からの学びを伝えなくてはと思って、この一冊にまとめてみました。

「絵本時代」は、読み聞かせをとおして、親や祖父母との心のふれあいを、たっぷり満たすことのできるチャンスであり、やがて一人で読書をするための、大事な土壌づくりの時代です。とくに0歳から可能な絵本でのふれあい、その積み重ねは、「ことばの発達」と「心の成長」に驚くほどの効果がみられます。なによりも豊かな心と、家族の絆がしっかりと育ちます。「あせらず、背伸びせず」お子さんと一緒に、絵本の世界を楽しんでいただきたいと願っています。「もっと読んで！」といわれたら、本好きの始まりです。絵本の世界、読書の楽しさを知りはじめたと思ってよいでしょう。

本書は4章構成でまとめました。第1章は、家庭文庫の初期の頃の状況です。今、ふり返るとすずらん文庫としての活動の基本スタイルは、ほぼできていたようです。読み聞かせの大事さも十年近く続けてみると「八か条」としてまとめることができました。本好きにするコツも見えてきましたので、保健所での講演や原稿依頼にも応じていました。この章では一九七〇年代後半から八〇年代前半にかけて執筆したものの中から三本選びました。

第2章は、0歳からの「ことば育て」と「親子コミュニケーション」が楽しく実現できるようにと取り組んだ、保健所文庫のことが中心です。それは保健婦さんたちとの連携で実ったもので、区内で生まれたすべての乳幼児に、絵本との出会いを可能としました。私は母子保健に熱心な保健婦さんたちに恵まれ、全六か所の保健施設に文庫を設置し、絵本相談と貸し出しを始めることができました。ここでは住民サイドと保健行政サイド、双方からの講演記録や学会報告、専門誌執筆を基本に構成しました。

第3章は、私の文庫活動の基本理念である「子どもの主体性、自主性」の尊重を、家庭や地域の教育論として、その折々に雑誌などに執筆したものです。その後、二〇〇〇年代に入って、「0歳児と絵本」の運動がブックスタートや、国の母子保健の全国運動（「健やか親子21」～絵本と出会う・親子ふれあい事業～）へと広がるなかでも、この基本理念は変わりません。絵本を意識的にとり込み「豊かな子ども時代を」という願いが、すべての乳幼児を対象に、全国展開になったことは非常に嬉しく思っています。

第4章は、「布の絵本」の取り組みです。私の場合は障害をもつ子との出会いから始まった活動です。その後、一九八五（昭和六〇）年以降、練馬区立図書館では講習会を毎年開催しています。二〇〇八年現在全一一館合計八〇〇冊超える布の絵本があり、一般書と同じく貸し出しがされています。私の次の目標は、全国の公共図書館に布の絵本のあることを常識にしたいと考えています。一方、国際的広がりにも力を入れています。とくに発展途上国では、教材として先生方や図書館員、母親たちによる手作りが始まっています。国内外すべての子どもに、市販される絵本と同時に、心と心を結ぶ手づくり「布の絵本」も活用したいと思っています。そのことをとおして、すべての国・地域の子どもたちに「ことば＝母語」の喜びを実現させたいと願っています。それは一人一人の子どもにとっては、当然の学習権であり、生存権であるからです。

もくじ

はじめに　10

第1章　あの子もこの子も本が好き――地域を結ぶ家庭文庫の実践から　15
（1）積極的活動が連帯へ――文庫三年目　16
（2）子どもの文庫と親の読書会――文庫四年目　19
（3）こんなにも大事な絵本の読み聞かせ　25
●すべての子どもに言葉（母語）の喜びを　54
●すずらん文庫35年間のひろがり　55
●文庫と自治体とのかかわり　56

第2章　育児の基本と絵本の楽しみ――つくって遊んで学ぶ保健所文庫の実践から　57
（1）地域の中での育ちあい――保健所は私たちの実家　58
（2）子どもと大人の過ごしやすい場をつくりだす――保健婦の力　地域の力　79
①ゆとりある子育てをめざして――「子育て学習室」三年間の歩み　79
②保健婦はどう考えどう取り組んできたか　83
③子どもと一緒に遊ぶ「わんぱくランド」　91
④高層住宅環境と母子の健康――1歳6か月児とその母親の生活　98
⑤高層住宅環境と母子の健康（Ⅱ）――1歳6か月児の生活リズム　100
（3）人間を育てる胎児期や乳児期のかかわりとは　104
●講師活動、普及啓蒙活動など　122

第3章　子ども時代の豊かさとは――すべての子どもが主体となれる環境を　127
（1）「管理主義教育と父母の意識」を読んで　128
（2）親育ちが試される　134
（3）子どもたちの思考力と創造力を育む　146
（4）誰のための「超早期教育」　149
（5）新たに始まった0歳児サービスの動き　154
（6）絵本で子育て・親育ち　162
●「子ども読書年」の理念　195
●おもな著作など　196

第4章　広がり深まる布の絵本の世界――人権・環境・平和の願いをこめて　☒☒☒☒　197
（1）心と心を結ぶ「布の絵本」　198
（2）「布の絵本」とは　200
（3）「布の絵本」の始まりと国内の広がり　206
（4）「布の絵本」のこれから――国際的動きから　237
●日本のバリアフリー図書の歩み　252
資　料　261
児童憲章　262／子どもの読書活動の推進に関する法律　263
文字・活字文化振興法　265／国際連合憲章〔前文〕　268／世界人権宣言　268
子どもの権利条約　273／ユネスコ公共図書館宣言　291
あとがき――さいごにお伝えしたいこと　294

表紙絵・本文イラスト　本間　弘章
写真提供　渡辺　順子

第1章　あの子もこの子も本が好き

地域を結ぶ家庭文庫の実践から

（1）積極的活動が連帯へ―文庫三年目

母親たちのコミュニティーセンター

一九七三（昭和四八）年一〇月に、東京都練馬区内で三人の母親と七人の子どもたちでスタートしたすずらん文庫ですが、満三年目を迎えた現在、一〇〇人余りの子どもたちと二〇～三〇人の母親たちのコミュニティーセンターとなっています（たまり場とか井戸端会議の場といったほうがぴったりかしら）。

振り返ってみて、いろいろなことを楽しみながらしてきたことに、改めて驚いています。これらの一つ一つの積み重ねが、あんがい、なんでも自由に話しあえる雰囲気を醸し出しているのかもしれません。

すずらん文庫は、子どもの本の貸し出しと読み聞かせの場ですが、本の話題が中心とはかぎりません。子どもを育てていての悩みや喜びが、おたがいにとって貴重なものとして受けとめられます。都市化現象のなかでの「人間疎外」、そして「核家族化」。日常生活のなかでちょっとしたお知恵拝借ができる、ということはありがたいことです。「孤立、孤独」ということは、なにもお年寄りだけの問題ではありません。母親も、そして、子どもでさえもそうなのです。そんなときに、文庫で知りあった者たちがなんでも話しあえたり、田舎の珍しい物を分けあえることの意味は大きいと思います。

生活が便利になるにつれて、人間らしい営みである「読む」「書く」「考える」「創る」といったことがおっくうになり、退化しつつあるのではないでしょうか。心の豊かさは、物質的豊かさに反比例するように貧しくなってはいないでしょうか。一地域のささやかな家庭文庫ではありますが、子どもたちが、丈夫な体と豊かな心の持ち主に育つよう、これからも今までのように、知恵を出しあい、力をあわせたいと思っているところです。

子ども中心の活動

1 本の貸し出し（毎週水曜日、一人三冊）
2 読み聞かせ（集団読書の楽しさ、本の紹介）
3 手づくりごと（和紙折染、万華鏡づくり）
4 文庫の花火大会
5 文庫のクリスマス会
6 民話あつめ（昭和五〇年夏休み）
7 夏休みの生活文集（昭和五一年夏、書く力を）
8 月刊誌の購読（福音館の『かがくのとも』他）
9 『少年少女新聞』の購読
10 仮説実験教室への参加（わかば科学文庫）
11 自然観察（メダカの卵、オタマジャクシ）
12 ハイキング（わかば科学文庫と合同）
13 木下化石採集（日本親子読書センターの野外教室参加）
14 よい映画、児童劇、音楽鑑賞（池袋子ども劇場入会、この指とーまれ音楽会など）
15 著者を囲んで（まついのりこ先生）
16 手づくりの年賀状